4. 骨髄抑制（こつずいよくせい）の治療法について -簡単に述べます

骨髄抑制に対する治療法は、対症療法が行われます。症状が軽いうちに対処することが大切なので、何か症状があれば医療機関に相談しましょう。また、患者さんから「食事や運動などで改善できませんか?」と聞かれることがあります。しかし、抗がん剤の副作用である「骨髄抑制」に対して、日常生活上の行動ですぐに効果が得られるような行動はないので、無理はしないようにして下さい。

それでは、血球別に概要を述べます。

《白血球減少時の治療》

感染を起こさなければ、大きな問題にはなりませんが、感染徴候には十分注意する必要があります。また、痛む所や腫れているなどの症状がある場所で、感染場所の特定と使用する薬がわかることがあります。

①感染予防対策

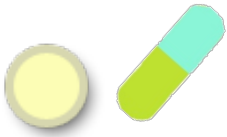
基本的な感染予防対策は継続して下さい（11～21ページ参照）。

②抗菌薬（抗生物質、抗ウイルス薬、抗真菌薬）の使用

感染が起きた、または起こる可能性が高い場合は、細菌やウイルスを退治するために使用します。内服は医師の指示通りにして下さい。内服の途中で症状が軽減しても自己判断で内服を中止しないようにしましょう。

③好中球（こうちゅうきゅう）を増やす薬

G-CSF(顆粒球コロニー刺激因子)を使用します。これは、好中球数を増やし、骨髄機能回復までの期間を短縮し、感染リスクを下げる目的で使用します。投与する時期や適応は、適正使用ガイドラインに従って一人ひとりの状況により異なります。



《血小板減少時の治療》

出血を起こさないように注意しましょう。

①出血予防対策

怪我に注意をする、鼻を強くかまないなど日常生活で注意できることは行って下さい。万が一出血した場合は、冷やしたり圧迫したりして、止血を試みて下さい。

②輸血

血小板減少を速やかに改善する効果があります。適応については一人ひとりの状況により異なります。

《赤血球減少時の治療》

白血球や血小板に比べて、抗がん剤の影響が出現するには時間がかかるので、長期的に観察をする必要があります。また、慢性的に経過することがあるので、自覚症状がわかりにくい場合があります。

①症状が強い時は安静にして下さい

貧血がある時は、疲れやすくなります。また立ちくらみや体のだるさのため、転倒しやすくなるので、無理をしないようにして下さい。

②輸血

赤血球減少を速やかに改善する効果があります。適応については一人ひとりの状況により異なります。